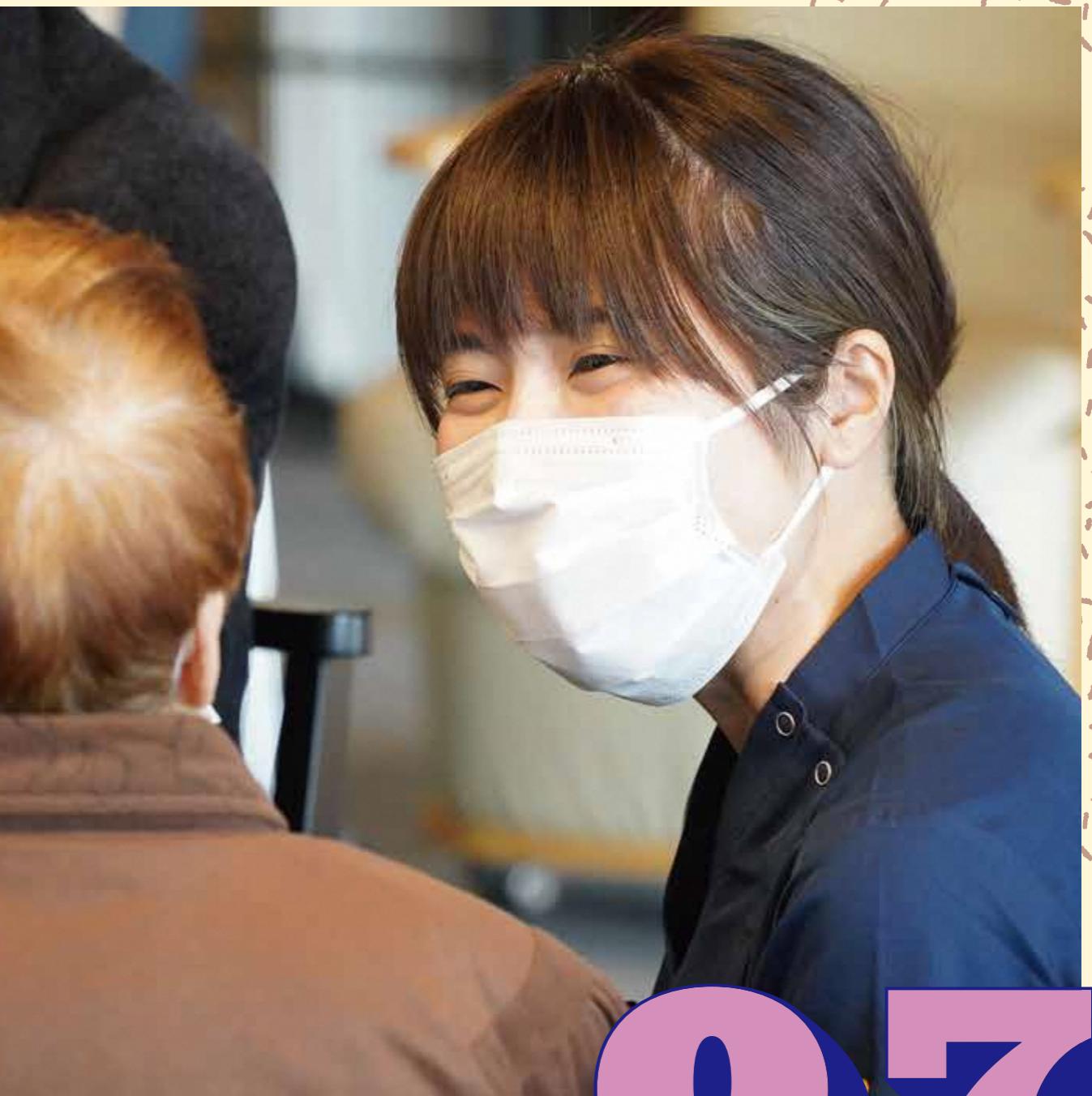


HOT! FUN! IWAKI!

# MIRAIの 医療ZINE(人)



特集 対話から始める  
中山間地域の医療のこれから

## 未来へつなぐ、次の一步

「これで終わらせないでね。また絶対来てね」。これは、三つの地域すべてでいただいた言葉です。私たちも全く同じ気持ちです。地域ごとのニーズを聞く、という最初の一歩が始まったばかり。これから、それぞれの地域の医療ニーズをさらに詳しく把握し、私たちに何ができるのかを具体的に検討していく段階に入ります。

健康に役立つ講話や出前講座のようなものだけで十分なのか、それとも月に1~2回医師や看護師がそれぞれの地域に出向き診療する「巡回診療」が必要なのか、そしてそれを補完する形で「オンライン診療」が加わるのか、選択肢はいくつかあります。

ですが、いずれにせよ「地域の医療のこれからを探る」とは、一方的にサービスを提供することではありません。今回、それぞれの地域を回ったように、直接足を運び、出会い、向き合い、語り合う。その積み重ねの先にこそ暮らしの本当の姿が分かり、地域と医療の双方が納得できる「あり方」が見えてくるのだと思います。このチャレンジは、まだ続きます。



三和・川前・田人いずれの地域でも、質問の挙手は止まらなかつたし、医療センタースタッフとともにを行う実演は盛り上がった。この交流が大事だと思います。

△ ここでは紹介しきれないので、ぜひサイトをのぞいてみてください！／

WEBサイト <https://iwakinoiryo.com>



## 編集後記

今回は「中山間地域の医療のこれから」の小さな一步目について特集しました。いわきでも全国的にも、医療資源の乏しい中山間地域では「オンライン診療」という言葉が飛び交います。ですが、今号にあるように、地域の方々は諸手を挙げて望んでいるわけではなさそうです。顔の見える関係やつながり、信頼という土台が必要かもしれませんし、仮にオンライン診療を行うにしても「D to P with N」と呼ばれる方式が全国的には展開されています。D(ドクター)とP(患者さん)はオンラインだけれども、P(患者さん)の脇にはN(ナース/看護師さん)が一緒にいるというスタイルです。人にも地域にも「寄り添う」ことが何より大事なんだと思います。

## 取材協力

いわき市医療センター、三和支所、川前支所、田人支所、川前小さな拠点OOCA（おおか）





## 対話から始める、中山間地域の医療のこれから



福島県いわき市は、東京23区の倍ほどの約1,232km<sup>2</sup>という広大な面積。その広さに対し、医療資源、特に医師の数は決して十分ではありません。人口10万人あたりの医師数は183人と、全国平均の262人や福島県平均の219人を大きく下回っています。

この「広大な面積」と「医師不足」という課題は、中山間地域により深刻な影響を及ぼしています。しかし、「しょうがない」と諦めるのではなく、未来のために何ができるのか。いわき市医療センターと地域住民が手を取り合って始めた、これからの医療のあり方を探るチャレンジを紹介します。

文 = 猪狩僚／江尻浩二郎 写真 = 鈴木宇宙／熊田誠

### すべてはトップの思いから始まった

このチャレンジは、いわき市医療センター病院事業管理者である新谷史明先生の思いから始まりました。「広いいわきで、なおかつ医師不足だから、中山間地域は医療資源がとても乏しい。だからと言って、手をこまねいているのではなく、少しでもお役に立てることはないか模索したい。それが公立病院としての役割じゃないだろうか」。

新谷先生が大切にしたのは、まず地域の声を聞くことでした。「我々が一方的に何かをするのではなく、それぞれの地域の現状やニーズをきちんと聞いた上で、できることを検討したい」。この思いが、行政と医療センターを動かし、具体的な一歩へつながっていきます。

### 「おでかけ医療センター」いざ出発

私たちは、新谷先生の思いを形にするため、まずは中山間地域に直接足を運び、地域の方々の生の声を聞くことから始めました。郵送アンケートでは汲み取れない、医療だ

けではない「暮らし」全体の現状や、地域ごとの細かな違いを感じるためです。

こうして始まったのが「おでかけ医療センター」。新谷先生をはじめ、看護師、薬剤師、管理栄養士、理学療法士といった多職種の専門職がチームを組み、地域に出向きます。健康に関するお役立ち情報を提供しつつ、住民一人ひとりの相談に乗り、その場で地域の課題や暮らしについて深く聞き取る。そんな対話と交流の場です。三和地区、川前地区、田人地区の区長さんや支所など関係者の皆さんの協力を得て、プロジェクトはスタートしました。



「タンパク質は手のひらに乗る量を目安に食べましょう」ポーズでパチリ

### 地域に広がる歓迎の輪

記念すべき第1回は、2024年11月、三和ふれあい館で開催。初めての開催にもかかわらず12名の住民が参加し、会場は大いに盛り上りました。専門職ごとの相談ブースには列ができ、区長さんから「また絶対開催してね」と嬉しい言葉をいただきました。イベント終了後には、なんと地元の方々が手打ちそばを振る舞ってくださるサプライズも。病院内で奮闘するスタッフが地域に飛び出し、住民に感謝され、温かいもてなしを受ける。医療と地域の素晴らしい出会いと交流が生まれた瞬間でした。

2箇所目は、雪深い川前地区へ2024年12月に伺いました。いわき市は比較的温暖な地域ですが、川前地区は違います。会場の「小さな拠点OOCA（おおか）」へ向かう道中で、川前の冬の厳しさを目の当たりにしました。医療機関のないこの地区では、雪が積もり凍結した道を自ら運転して市外の病院へ通うほかありません。その大変さを、現地を訪れて初めて痛感することができました。

外の雪景色と打って変わって、会場は20名を超える方々の熱気で満ち溢っていました。専門職が参加者の輪の中に入って話を聞く形式をとったところ、医療や移動手段、暮らしの課題まで、より深く知ることができました。80歳を超えて自分で運転して通院する方の話を聞き、新谷先生はじめスタッフ一同、このチャレンジへの決意を新たにしました。



川前地区的会場「小さな拠点OOCA（おおか）」の前で地域の皆さんと一緒に

年度が変わり2025年7月、3箇所目の田人地区では、始まる前から感動的な出来事が。事前説明会で、ある区長さんが「移動手段のない人にこそ来てもらいたい。地域の送迎車”ほっこり号”を使おう」と提案してくださったのです。「ほっこり号」は、住民同士の助け合いにより、移動が困難な方に対する移動サービスのこと。医療センターが来てくれるなら、自分たちもできることをしよう。医療と地域が互いに「呼応」し、一緒により良い場を作ろうという思いがそこにはありました。当日は20名以上の方が参加し、質問の挙手が止まらず、予定時間を大幅に超えるほどの活気と笑顔に包まれました。



ご覧のとおり、地域の方々も医療センタースタッフも終始笑顔

### 見えてきた、本当のニーズ

三地区を巡り、住民の皆さんと向き合う中で、いくつかの発見がありました。聞き取りアンケートからは、三地区とも自分で運転して月に1回通院している方が多いことが分かりました。

また、川前と田人は半数が「オンライン診療を希望しない」と回答しています。田人は地区内に診療所がありますが、医療資源もなく交通アクセスもとても厳しく、最も「オンライン診療」のニーズがありそうな川前地区でも「希望しない」という声が多かった。

医療の現場には「病ではなく人を診る」という大切な言葉があります。このアンケート結果は、もしかしたら患者さん側も「人」に診てもらいたい、という気持ちの表れなのかもしれません。オンライン診療という便利な手段も、顔の見える信頼関係という土台があって初めて、安心して受け入れられるものなのでしょう。この気づきは、病院や役所の机にいるだけでは決して得られない、現地に足を運んだからこそその価値あるものでした。

裏面につづく →